

AIを多面的に考える

1. 人工知能と共に生きる

市川 嘉裕

2. AIを正しく理解し、利用していくために

工藤 郁子

AI (Artificial Intelligence) といわれる人工知能は、現代社会において様々な場面で使用されている。例えば私たちの身近なところでは、スマートフォンにおけるAI機能が挙げられる。スマートフォンの使用者の行動パターンや好み等を分析して予測を立て、使用者に適したアプリの提案や情報の提供が行われている。また「お掃除ロボット」といわれるように、機械に内蔵されたセンサーによって家の中の間取りを学習しながら、障害物にぶつからず掃除を行うといったことにもAI技術が使用されている。

これらAIの技術は、「便利」で「楽」で「手間」がかからないということが良い面として主張される場合が多い。しかし一方で、筆者があるAIの専門家から話を聞いた時に「AIは融通が利きません」と述べられていたのがとても印象的であった。AIは大きな力を発揮する一方で、最初の「入力」を間違えた後に、相手を慮ることや、心配して配慮したりすることや、物事を転じて考えみるといったことを、状況や必要に応じて行うことは難しいといえる。

またAIが様々な仕事を代行することによって、生産性が上がること（＝人件

費等のカット）が大きなメリットとされているが、仮にありとあらゆるところでAIが導入され、生産性を上げることが達成されれば、短期的には利益等が出たとしても、長期的には社会の中に失業者や貧困者があふれ、購買力そのものが失われるため、様々な事柄が縮小していくことが予想できる。

大事なのはAIをはじめとする様々な情報関連技術を使用する意味を十分に考え、それらに過度に頼り、安易に取り入れるだけではなく、どのように向き合っていくかということを、私たちが当事者意識と想像力を持って、行動していくことではないだろうか。

総論ではこうしたAIについて考える企画として、市川嘉裕氏には人口知能の発展の経緯とその仕組みや課題について、工藤郁子氏にはAIの技術に対して人々や社会はどのように向き合えば良いのかということについて、多様な観点から述べて頂いた。本号を通じて、今後より生活の中での接点が増えてくるであろうAIについて考え、日々の中で行動していくきっかけとなれば幸甚である。

（本研究所研究員 片上 敏喜）